

淋巴腺類肉腫症の1例, 特に Schaumann 体 (Schaumann Body) 及び星芒体 (Asteroid Body) の形成に就いて

岡山大学医学部病理学教室 (指導 田部 浩教授)

助 手 重 松 舜 祐

専攻生 吉 岡 勝

[昭和 28 年 6 月 28 日受稿]

類肉腫は 1875 年 Hutchinson⁴⁾ により Mortimer's Malady の名称を以て記載され, その後 Besnier (1889)¹⁾, Boeck (1899)²⁾ によってその皮膚病変の臨床的並びに病理組織学的所見の詳細が記述されて以来本症は主として皮膚科領域に於ける疾患として報告され, 本邦に於ても竹谷 (1921)¹⁹⁾ の報告以来現在迄に 70 余例の皮膚類肉腫に関する報告があるが, ^{9), 10), 14), 20), 21)} 近年米国に於て本症は皮膚のみならず広く内臓諸器官を侵襲する疾病・類肉腫症 (Sarcoidosis) として全身疾病観的な立場から注目されつゝあり⁹⁾, 又類肉腫の原因に関しても従来は結核菌を始め梅毒スピロヘータ・癩菌・ブルセラ・真菌 (Streptothrix, Candida albicans 等)・原虫 (Leishmania 等)・ビールス・異物特に硅酸含有物質等が挙げられて来たが⁹⁾, 最近では本症病変を種々の抗原性病原因子に基因するアレルギー性組織表現として理解せんとする趨勢にある.^{6), 7), 8), 9), 14), 22)} 本症の組織病理に就いては既に一般に容認された Njkersen¹³⁾ の標識があるが, 本症病巣に屢々出現するとされている特異な包摂体 (Inclusion Bodies), 即ち Schaumann 体 (Schaumann Body)¹⁷⁾ 及び星芒体 (Asteroid Body)³⁾ の本態に関しては永らく未解決であつた. 1952 年 Jaques^{8), 9)} は類肉腫症に関する詳細な綜説を行うと共に糞線虫 (Strongyloides stercoralis) の仔虫に基因しアレルギー性反応機序によつて発生したと考えられる自験例を報告し, 同氏によつて始めて Schaumann 体と線虫類仔虫との関連性が指摘されたが, 最近我々も急性燐中毒症のために死亡せる 1

女性屍体に於て, 剖検により偶然多数の蛔虫寄生並びに頸部淋巴腺及び気管分岐部淋巴腺に Schaumann 体及び星芒体の出現を伴つた類肉腫性病巣を発見し, 類肉腫と蛔虫との因果関係に聊か示唆を与えられる所見に接し得たので以下概略を追加報告しこの間の消息に就いて考察を試みたい.

症 例

22 才 女子

臨床的事項

家族歴及び既往症に特記すべきものはない. 昭和 25 年 10 月 6 日自殺の目的を以て猫イラズ約 10 瓦 (黄燐含有量約 0.8 瓦) を嚥下し, 黄疸・肝腫大・意識濁濁を来して服毒 122 時間後に死亡した. 赤血球数 374 万~450 万. 白血球数 3700~4450. 赤沈 42mm/1 時間・59mm/2 時間. 血清蛋白量: 総蛋白 7.87g %・アルブミン 3.98g %・グロブリン 3.89g %, A/G1.02. Wassermann 氏反応陰性.

病理解剖学的診断

1) 頸部淋巴腺及び気管分岐部淋巴腺の Schaumann 体及び星芒体の出現を伴う類肉腫症

2) 蛔虫寄生 (♂ 12 隻・♀ 3 隻)

3) 右肺下葉及び右肺門部淋巴腺の結核初感染群並びに左胸膜の索状癒着

4) 実質性臓器及び組織の広汎なる脂肪変性 5) 消化管粘膜の脂肪変性・壊死及び壊瘍形式 6) 出血性素因 7) 脂肪血症 8) 中等度の黄疸 9) 脳浮腫 10) 腎・脾の鬱血及び充血並びに軽度の脾内細胞回帰

病理解剖学的所見摘要

栄養甚だ可良で, 外表には中等度の黄疸が

みられる他は著変がない。

内部諸臓器には燐中毒性病変の他に小腸内に15隻の蛔虫（♂12隻・♀3隻）の寄生が認められ、又右肺下葉胸膜下に粟粒大の中心部に軽度の石灰化を来せる結核初感染巣（Ghon氏巣）があり、これに対応して下葉に属する右肺門部淋巴腺には粟粒大乃至米粒大の硝子様被膜及び中等度の淋巴球浸潤帯を以て被包せられた2個の乾酪化巣が認められたが、これ等の結核性病変の他に頸部淋巴腺及び気管分岐部淋巴腺に特異な類肉腫性病変が発見された。

局所所見 頸部淋巴腺には示指頭大に腫張せるものが1～2個あり、その硬度は硬く、断面に於ては多数の粟粒大の灰白色小病巣が認められる。組織学的にこれ等の病巣は集積せる多数の類上皮細胞群を主体とした肉芽性結節で、少数の巨態細胞を混え、周辺を淋巴球及び少数の結合組織細胞が圍繞する。巨態細胞は異物型のものもみられるが、多くはLanghans氏型を呈し、一般に大きさが普通の結核性病巣にみられるものよりも大型で、核の数も多く、又胞体は周辺帯及び中央部が特に好酸性を示し、核排列帯及びその内側帯は泡沫状を呈して淡紅色乃至は少々好塩基性に染まるものがかなり多数認められ、更に胞体中央の好酸性部位の中心も淡紅色乃至淡青色を呈し、その結果淡紅色乃至淡青色に染まる胞体の周辺及び中央部に環状の好酸性着染部位を現出するものや、或は核が甚だ淡明で、淡紅色乃至淡青色を呈する胞体内に不規則・斑紋状の紅染部位を示すものもあり、全般に胞体の被染性は甚だ不安定且つ不均等で普通のLanghans氏型巨態細胞の如く胞体が平等に紅染するものは稀であつた（第1図参照）。乾酪化は何処にも認められないが、病巣の中心部に線維素性壊死を来せるものがあり、又少数の好中球・淋巴球の游走を伴うものもかなり多数認められた（第2図参照）。結核菌染色所見は陰性である。Von Gieson氏染色により結節周辺には中等量の膠原線維の産成が証明され、又嗜銀線維は特に結節の周辺に

豊富であるが、多くの病巣に於ては結節内部にも放線状に排列せる染維が染出された。猶これ等の病巣間の小動脈には壁が少々肥厚し、外膜細胞の腫大・増殖を来せるものがある。

興味ある所見として上記の病巣に随伴して処々に少々不明瞭なる二重の輪廓をもつたキチン質性の特異な屈光性の層状の異物体の出現がみられる。その大きさは20 μ 乃至150 μ でかなり変動があり、少々不正な円形乃至橢円形を呈し、内部構造は一般に不明瞭であるが、一部には崩壊せる核部片の認められるものがある。該異物体はヘマトキシリン・エオジン重染色標本に於ては淡青色乃至濃紫色を呈し、Unna-Pappenheim氏染色により特に外殻の内側帯が深紅色に着染され、Van Gieson氏染色及びMallory氏染色ではそれぞれ赤色及び青色に染まり、Masson氏染色では被染性を示さず、又Giemsa氏染色では淡青色に染まるものが認められた。これ等の異物体は主として巨態細胞に貪食されて存するが、大なるものは一部が巨態細胞の胞体外に突出し、或は数個の巨態細胞に圍繞されるものもある（第3図及び第4図参照）。猶これ等の異物体の他に少数ではあるが巨態細胞の胞体内に星芒状の突起を有する特異な構造物が観察された。本構造物は好酸性を示し巨態細胞の胞体と略々同程度に紅染するが、一般に周囲の胞体が少々淡紅色・泡沫状を呈するためにその輪廓が明瞭であつた（第5図参照）。

猶気管分岐部淋巴腺にも上記の肉芽性結節に一致する構造をもつた少数の小病巣及び異物体の出現が認められた。

總括並びに考按

本例は自殺の目的で服用した猫イラズのために急性燐中毒症を来して死亡し、剖検によつて全く偶然に多数の蛔虫寄生並びに頸部淋巴腺及び気管分岐部淋巴腺に特異な包摂体の出現を伴つた類肉腫症が発見された例であり、本例の類肉腫性病巣中に認められた屈光性・キチン質性の異物体並びに星芒状の突起をもつた構造物は形態学的にそれぞれ類肉腫症に

伴つて出現することの多い特異な包摂体として報告されて来た Schaumann 体 (Schaumann Body) 及び星芒体 (Asteroid Body) に一致する。

Schaumann 体 (Schaumann Body) は 1917 年 Schaumann¹⁷⁾ の記載以来類肉腫症に関係を有する包摂体として注目され、癩・結核・紅斑性狼瘡或は性病性淋巴肉芽腫等に証明されたと言う報告もあるが^{15), 16)}, 類肉腫性病巣に伴つて出現する場合が比較的多く, Skavlem・Ritterhof 等¹⁸⁾ は剖検上類肉腫症例の 4% に Schaumann 包摂体を認めたと述べ, Riley¹⁶⁾ は 44 例中 7 例に, 又 Ricker・Clark 等¹⁵⁾ は 3.6% に本包摂体を証明したと言っている。Schaumann 体の本態に関しては未だ不明の点も多く, 多数の学者によりカルシウム及び鉄の沈着せる弾力線維の変性産物と考えられてはいるが⁹⁾, 1952 年 Jaques^{8), 9)} は本包摂体が糞線虫 (*Strongyloides Stercoralis*) に由来することを指摘し, 初期の段階に於ては Schaumann 体の内部に中心部の好酸性の腺管様構造と周辺部の圧平せられた核が認められると述べ, Schaumann 体と仔虫との移行像を提示した。本例に於ける類肉腫症の原因に関しては右肺に結核初感染群があり, 結核症との関係も一応考慮されるが, 他に活動性の結核性病巣がなく, 類肉腫性病巣中には結核菌を缺き, 他方 Schaumann 体の一部には内部に崩壊せる核破片を蔵するものがあり, 又腸管内にも多数の蛔虫寄生が証明されたので, その移行像は明瞭ではないが本例の Schaumann 体が蛔虫の仔虫に起源を有することも否定し難く, 原因を Kerr¹¹⁾, Jaques^{8), 9)}, 武田²⁸⁾ 等の唱える如く蛔虫に基因するアレルギー性組

織表現に求めたい。

猶星芒体 (Asteroid Body) は 1890 年 Goldmann³⁾ により皮様囊腫に証明されて以来 Torulosis・癩・Weber-Christian 氏病・結核・Histoplasmosis・住血吸虫症・Lipoid granuloma 等に出現せる例が報告されているが⁹⁾, Lever・Freiman 等¹²⁾ は文献上本包摂体を伴つた 68 例の類肉腫症例を集録し, 又 Ricker・Clark 等¹⁵⁾ は類肉腫症例の 2% に本包摂体がみられると言ひ, Jaques⁹⁾ は星芒体は類肉腫症の診断を決定するものではないが本症の診断に役立つと述べている。星芒体の本態に就いては Hirsch⁵⁾ によれば脂溶性溶媒に不溶性となつた結晶形の脂質であろうと考えられて居り, 又本包摂体と上記の Schaumann 体との關聯性は未だ全く不明であるが, 本例に於ては出現せる星芒体はすべて巨態細胞の胞体内はこれと密接な關係をもつて存在し, その所見は前記 Schaumann 体の所見とは明らかに異り, 外来性の有機体そのものとみるよりも寧ろ一定の特殊な病的刺激に対して胞体内に生じた内生性の形成物と考えられる像を呈し, 星芒体の外来性を疑問視する Jaques の記載⁹⁾ が想起された。

結 論

急性燐中毒症のために死亡し, 剖検により偶然多数の蛔虫寄生並びに頸部淋巴腺及び気管分岐部淋巴腺に Schaumann 体及び星芒体の出現を伴つた類肉腫性病変が確認され, 類肉腫症の發生が蛔虫の仔虫に密接な原因的關係を有すると考えられた 1 症例を報告し, Schaumann 体及び星芒体の本態に就いて考察を加えた。

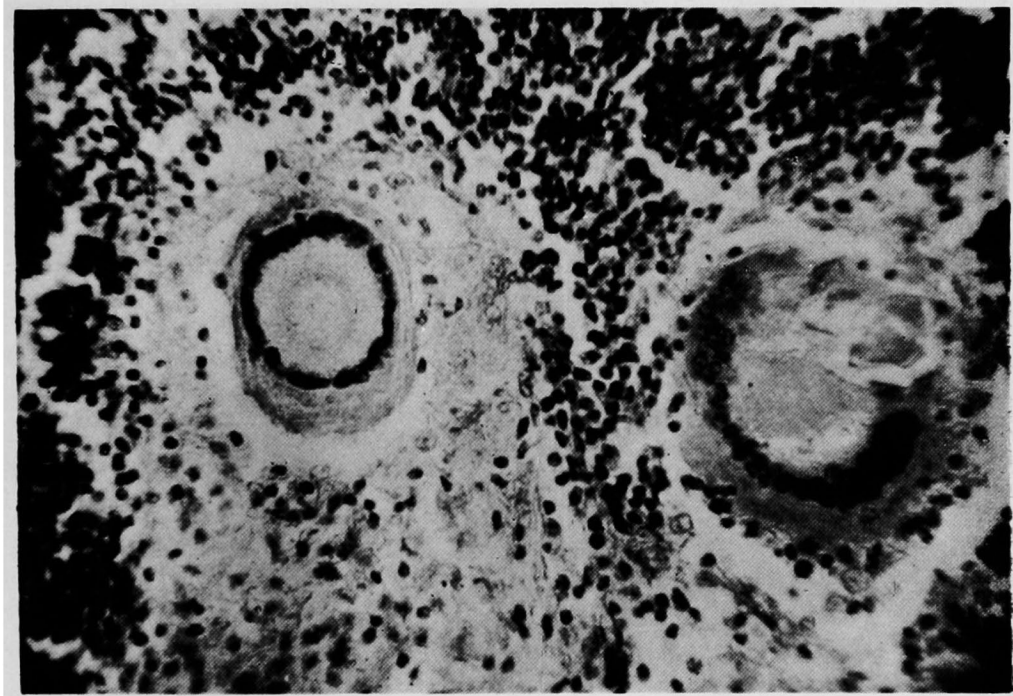
文 献

- 1) Besnier, E. : Ann. dermat. et syph. 10 : 333, 188. r. t. Jaques.
- 2) Boeck, C. : J. Cutan. & Genito-Urin. Dis. 17 : 543, 1899. r. t. Jaques.
- 3) Goldmann, E. E. : Beitr. path. Anat. 7 : 553~566, 1890.
- 4) Hutchinson, J. : Arch. surg., London. 9 : 307, 1898. r. t. Jaques.
- 5) Hirsch, E. F. : Arch. Path. 20 (5) : 665 ~ 682, 1935.
- 6) 樋口謙太郎・弘中哲也 : 臨床と研究. 27 (6) : 386~391, 昭25年.

- 7) 樋口謙太郎その他：皮膚と泌尿. 12 (3) : 140
~144. 昭25年.
 - 8) Jaques, W. E. : Arch. Path. 53 (6) : 550
~557, 1952.
 - 9) Jaques, W. E. : Arch. Path. 53 (6) : 558
~592, 1952.
 - 10) 古賀公吾：皮膚と泌尿. 3 (3) : 299~314,
昭10年.
 - 11) Kerr, K. B. : Amer. J. Hyg. 27 (1) : 28
~51, 1938.
 - 12) Lever, W. F. & Freiman, D. G. : Arch.
Dermat & Syph. 57 : 639, 1948. r. t. Ja-
ques.
 - 13) Nickerson, D. A. : Arch. Path. 24 (1) 19
~29, 1937.
 - 14) 西村長広・出来利夫：臨床皮膚泌尿器科. 4
(3) : 103~106, 昭25年.
 - 15) Ricker, W. & Clark, M. : Amer. J. Clin.
Path. 19 : 725, 1949. r. t. Jaques.
 - 16) Riley, E. A. Amer. Rev. Tuberc. 62 (3) :
231~285, 1950.
 - 17) Schaumann, J. : Acta med. scandinav. 106 :
239~253, 1941.
 - 18) Skavlem, J, H. & Ritterhof, R. J. : A-
mer. J. Path. 22 : 493, 1946. r. t. Jaques.
 - 19) 竹谷 実：皮膚科及泌尿器科雑誌. 21 (11) :
943~959, 大10年.
 - 20) 外塚岩太郎：皮膚と泌尿. 8 (3) : 218~232,
昭15年.
 - 21) 塚田 進・菊池省吾：臨床皮膚泌尿器科. 4
(5) : 195~199, 昭25年.
 - 22) 武田勝男その他：日本病理学会会誌. 42 (総):
昭28年.
-

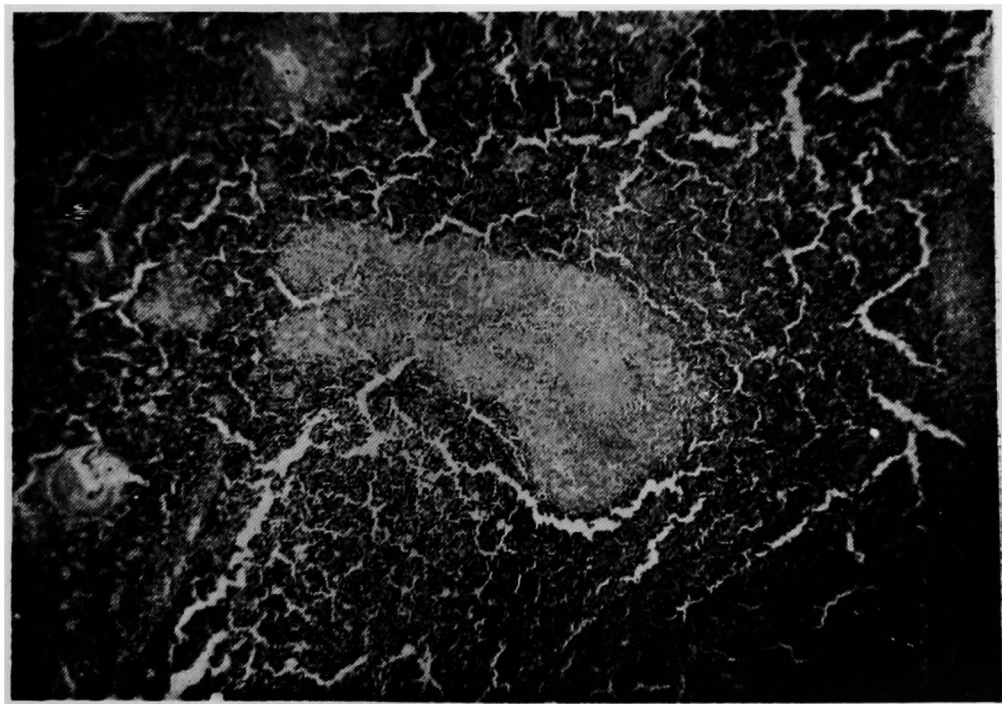
重松・吉岡論文附図

第 1 図



胞体が不均等な被染性を示す Langhans 氏型巨態細胞。右方の巨態細胞は
Schaumann 体を貪食しつつある。Leitz 3×7, H-Eosin 染色。

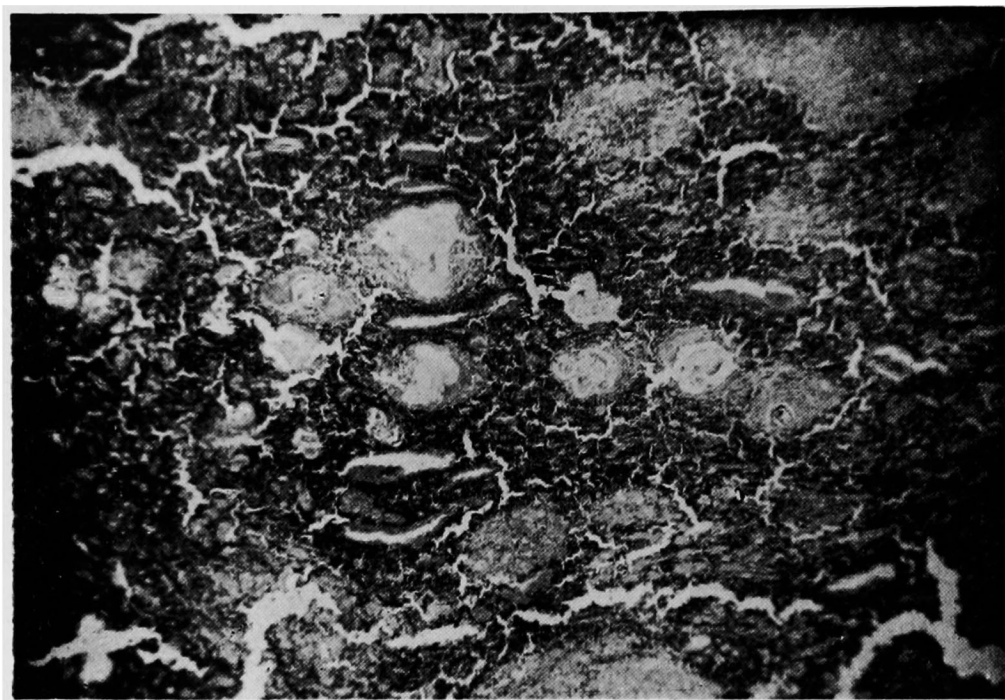
第 2 図



類上皮結節中心部の線維索性壊死。Leitz 3×3, H-Eosin 染色。

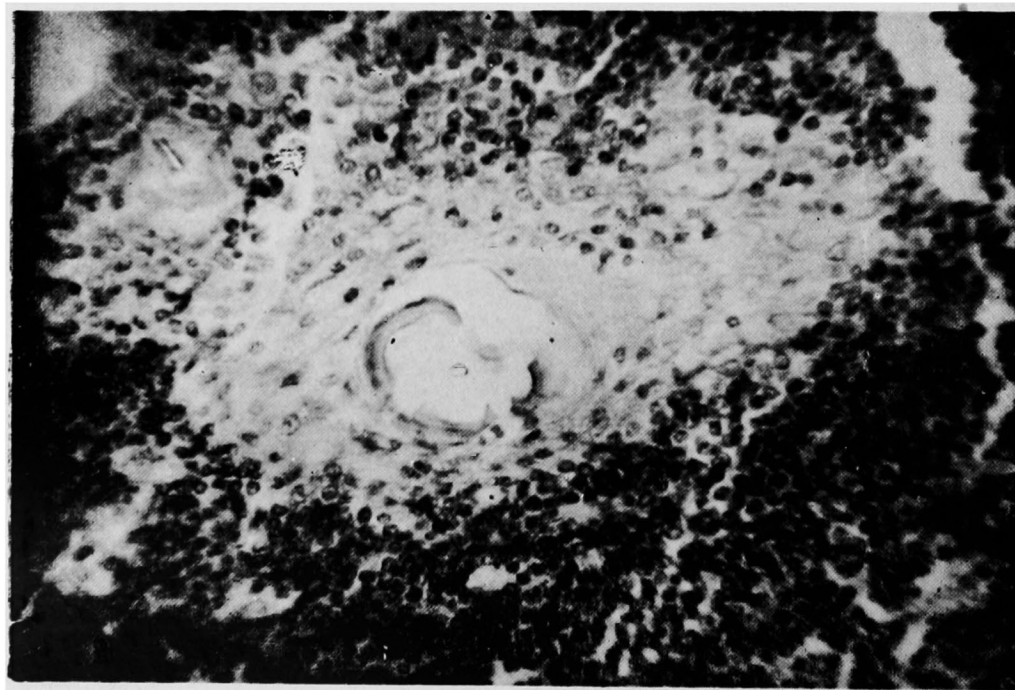
重松・吉岡論文附図

第 3 図



Schaumann 体. Leitz 3×3, H-Eosin 染色.

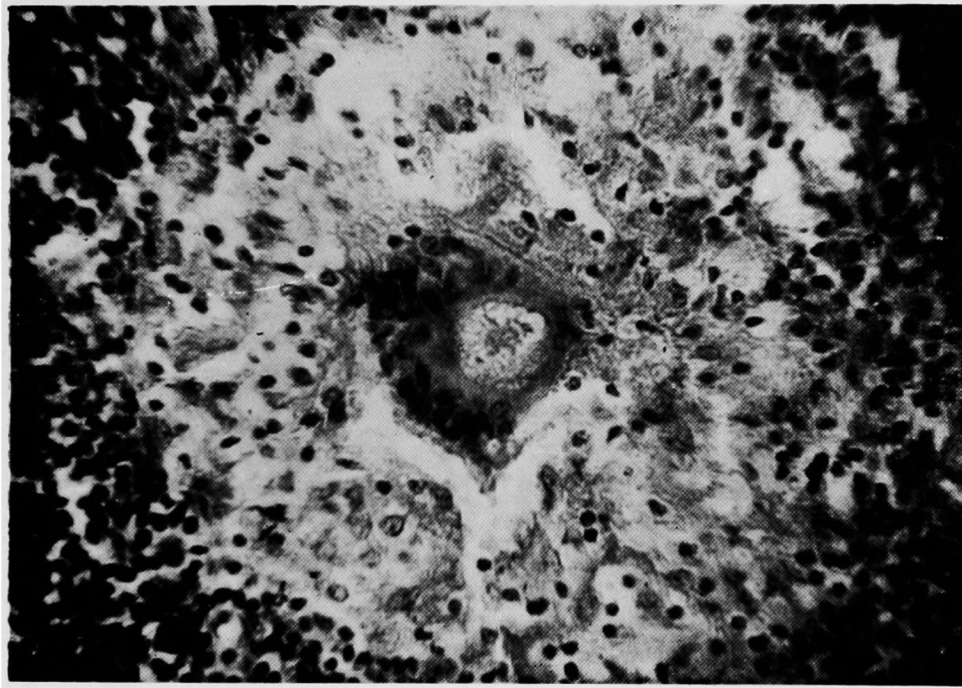
第 4 図



Schaumann 体. Leitz 3×7, H-Eosin 染色.

重松・吉岡論文附図

第 5 図



第芒体. Leitz 3×7, H-Eosin 染色.